

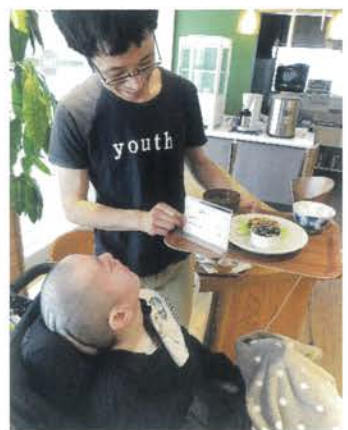


小さなたねの物語が描かれたステンドグラス (ガラスアート TAKAMI 製作・寄贈)

近年における障がいのある方たちの「住まい」の在り方として、数十人が一緒に暮らす「収容型」という入所施設から、「地域分散型」が推進され、数人が暮らせる「グループホーム」設置が政策へと反映されています。

私たちの住んでいるこの福岡市もしかし、グループホームを開設する事業者が増えていますが、しかし、「重症心身障害者」と呼ばれる身体・知的に重い障がいのある人たちが利用できるグループホームは、市内には未だ一つもありません。その理由の一つは、入浴・排泄等の身体的な介護度が高くなると、当然ケアする人を増やす必要があります。ところが、それだけの人件費に見合った収入がない、というのです。事業所の自助努力には限界があり、早急な政策の見直し求められるところです。

しかし、気を付けていかなければ



本日のカフェランチです。

シェアホーム つながりの共有

所長 水野 英尚

「住まい」の議論の中で、当事者たちは何処に居るのか、ということ。つまり、当事者が生活の主体者となって「誰と・何処で・どうやって暮らすのか」を考え、選択していく「住まい方」が問われぬままに、「ハウス」という箱モノの大小だけを論じることになってしまうということ。この「住まい方」を考える契機になればと、この10月から「Shared Home はたけのいえ」をスタートします。通常の民家で、重い障がいのある青年たちが暮らすことを始めます。この名に込めた思いは、単に「家」(ハウス)の共有だけでなく、「ホーム」(つながり)の共有です。家庭を開き、助け合い、寄り合って暮らしていく場所です。この「はたけ」に時かれた想いが、豊かに実ることを信じて――。

たねスタッフのつぶやき

今年4月より小さなたね、プラスでお世話になっている坂田です。

上の子の小学校卒業を迎え、私も久しぶりの復職。本場に緊張でいっぱいスタートでしたが、小さなたねに来られる利用者さんとご家族、スタッフに囲まれて、素敵な時間をもらっているなあ、と幸せに思う毎日です。



坂田 あす香 (看護師)

利用者さんが楽しく安心に過ごすためのお手伝いができるよう、温かい心とケアを大切にしながら、学びを深めていきたいと思っています。

どうぞ、よろしくお願ひします。

後記

秋は眠たい。2枚布団に母子3人で寝ていて、娘の寝返りの膝が私のお腹を直撃。ウツと叫んだ声に反応して、息子が私の頭に手を伸ばし髪をグイッ。以来、私は子供の足下に横に寝る。布団またぎで寝づらいが、たまに息子が伸ばす足で発作に気づける。子らも中高生。私はいつかこれも懐かしく思い出すのだろう。(E)

医療法人にのさかクリニック
 地域生活ケアセンター
 小さなたね
 〒814-0171
 福岡市早良区野芥4-19-31
 電話 092-834-8090 FAX092-834-8091

地域生活応援
 たねプラス
 〒814-0172
 福岡市早良区梅林6-23-3
 電話 092-874-3051 FAX092-874-3052

E-mail » chisanatane@tune.ocn.ne.jp
 ホームページ » <http://chisanatane.com>



「する」と「される」だけ？

茨城県の常盤自動車道で、執拗に「あおり運転」を行い、暴行を加えたニュースがありました。日頃から車を運転する者として、それほどの執拗さは無いまでも、走行中に「あおられた」経験は一度や二度あるのではないのでしょうか。心の余裕の無さから生まれる「怒り」を、運転者が道路上で爆発させれば、車は瞬時に凶器と化します。あるいはまた、双方が対等な立場になりにくい状況による「ハラスメント」も後を絶ちません。最近では「カスハラ」(カスタマーハラスメント)と呼ばれる、「お客」となった人たちの暴言や暴力を振るう人が増えているようです。私たちの社会の中に人々の不満や苛立ちが蔓延して、日常の暮らしの中でゆとりを失った人たちが、そこかしこで苛立ちを噴出している状況だといえます。

どつてこんなにも、苛立ちや怒りを溜め込み、ふとした瞬間にそれを噴出させてしまうのでしょうか。もちろん、個人的な気質や性格もあるといえますが、人と人

執筆した哲学者の國分巧一朗氏は、古代ギリシャ語などの言語では、**能動態**(する)と**受動態**(される)だけでなく、**中動態**が重要視されていた、と語ります。そこに着目するようになったきっかけが、「謝罪する」ということを通してだそうです。

どんなに言葉だけの謝罪があったとしても、それは本質的な謝罪にはなりません。謝罪をする人の内側から湧き上がってくる、心から謝罪しようという思いが初めて、本当に謝ったことになるものです。つまり、「謝る・謝られる」という行為そのものよりも、その心の動きの方に意味があり、重点を置かなければならない、それらが言語(態)において大切に表現されていたというのです。現代はそうしたことに重点が置かれなくなった言語を用いることにより、実に私たちの暮らしそのものを豊かにし互いの関係性を見直すものを失っているといえます。

私たちが重い障がいのある方たちと出



「中秋の名月」(?)を楽しみました。

の関係性の在り方にも、そうしたことを生む要因があるようにも思います。

他者との関係性の在り方でいえば、「あおり運転」にしても、ハラスメントをする側には、まず、「相手からこうされた」という受け手としての理由(理不尽な理由が多いと思われませんが)があるはず。つまり、「こうされた」から「そうした」ということです。これは、悪いことだけでなく良い方に働くことだってあります。こんな良いことをしてくれた、だから「恩返しした」ということで。そのどちらもが、「する」と「される」の関係性の中で起こってくる動機ですが、一方は激しい「怒り」をつくり出し、もう一方は「感謝」を生み出す。それほどまで、私たちの感情に影響されるものです。

また、こうしたことが様々なサービスとなり、対価として還元されることにより、社会は「する・される」どちらかの立場に常に置かれて、そうしたことだけが、人間の営みの全てであるかのように考えるようになっていると言えないでしょうか。

「中動態の世界——意思と責任の考古学」(生活書院)を

会うとき、「する・される」だけでない、そこにある「心の動き」をどのようにして読み取っていくのが、彼(女)たちとのコミュニケーションの始まりといえます。しかし、スピード、効率、生産性が重要視される社会では、彼(女)たちの存在は一方的に「される側」の存在として位置づけられることでしょう。ところが、彼(女)たちと同じ空間、同じ時を過ごしていくとき、そこにある「心の動き」に気づき、体験し、想像を膨らませて喜びを共有することができます。確かにここには、現代における「中動態の世界」に生きる人たちがいると言えます。ゆとりを失って苛立つ世の中に、この世界の時の流れを是非感じて頂きたいと思えます。

それらは、慌ただしい日常の中では、うっかり見落としてしまうような、小さく静かな出来事ではありませんが、しかし、豊かに生きるヒントを得る体験に、きっとなることでしょう。



小さなたねの 夏祭り



2019



「小さなたね」「たねプラス」合同の夏祭りを開催しました。今年は「出店」（かき氷、ヨーヨー釣り、輪投げ、紐くじなど）を充実させ、ゆったりと楽しめたようです。祭りのフィナーレには、「花火アート」と題して色水が入った水風船が割れると歓声上がり、見事なグラデーションが出来上がりました。





4月に入職しました看護師の小泉です。2年前に数か月間、にのさかクリニックで在宅医療を学ぶため働かせていただいたので、初めてお会いする方ばかりではないかもしれませんが、どうぞよろしくお願いたします。

私は20代は救急外来を主に、小児科を含む様々な外来や透析で経験を積み、30代から40代は老年期の皆さんの看護をしてきました。どの分野も好きでしたし、看護師としての基礎と知識を得ることができました。今回50歳を前にずっとやりたかった在宅、なかでも病気や障害を持ちながらお家で暮らす子供たちと、そのご家族をサポートできる仕事によりやく就くことができました。

そう思うようになったきっかけの一つの出来事がありました。20年前のある晩、救急車で30代の女性が驚くほどの高血圧で運ばれ入院しました。数日後、外来にいた私に入院中の女性が近づき「この間はありがとうございました。運ばれてきた時、いつも知ってる看護師さんだったのでとても安心しました」と言われたのですが、全く思い出せずキョトンとしていたら、「数日前の真夜中に高血圧で運ばれたのは私です。私は優雅の母です」。運ばれてきた時の本当に辛そうな様子が鮮明に頭に浮かび、その人と今目の前に立つ女性が同一人物で、更にいつも外来に来ていた子のお母さんだと、やっとながりました。

優雅くんはいろいろな面で発達が遅れている子でしたが、名前の通り笑顔も立ち居振る舞いも優雅そのもので、小児科外来のアイドルでした。もちろんお母さんにも何度も会っているのに、救急外来で名前を見ても顔を見ても全く気付くことができないほどお母さんは疲れ果てていて、本当に辛く苦しそうな状



『月』

辺見 庸 著

(角川書店 / 1700円+税)

戦後最大の死傷者を出した「相模原障がい者施設殺傷事件」から3年。まもなく被告の初公開が開かれようとしています。犠牲となった方たちの「言葉」を小説という形で紡ぎ出した本書は、事件の「本質」を鋭く突きながら、誰もなしえなかった「まなざし」がここにあります。



態で運ばれてきていたのです。優雅君のことで大きな不安やストレスを感じ続けていたことが身体症状に出たと聞きました。

優雅君のことはいつも気にかけていたのに、お母さんのことは全く見ていなかった自分が恥ずかしく、お母さんの辛い状況に気づけなかったことが本当に申し訳なく思い出されます。お母さんがあんなにしんどくなる前にもっとできたことがあったのでは、という思いがずっとありました。

20年前の私がまったくできなかったことを、私はたくさんの方々にしていただきました。「お茶しておいで！ たまには一人にならないとダメ！」と背中を押してくれたことで何度救われたことかわかりません。あの時の後悔と反省を活かすことで、誰かの支えやお役に立つことができれば、こ

んなに嬉しいことはありません。

どんな病気や障害があっても、子供たちやご家族みんなが、できるだけ一緒に、お家や住み慣れた地域で笑ったり泣いたりしながら安心して共に暮らし、みんなで支えあいながら成長することができるように。今度は私が。

